琉球大学学術リポジトリ

父親の罪:Ibsen Ghosts, Melville Pierre の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-02-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平良, 柾史, Taira, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15747

Ryudai Review of Language & Literature, No. 27, 1982

父親の罪: Ibsen *Ghosts*, Melville *Pierre* の場合

平 良 柾 史

I、序

相ついで発表した *Brand*, *Peer Gynt* が好評を博し、一躍北欧文壇の巨星として登場した Ibsen は、1877年、79年に発表した *Pillars of Society*, *A Doll's House* で劇作家としての地位を不動のものとするとともに、西洋近代劇の父といわれる評価を受けることになる。*A Doll's House* は女性の独立解放という問題を痛烈に提起して全世界に衝撃を与えたのであったが、その2年後に出た *Ghosts* は、虚偽の結婚生活、道楽をきわめた父親の性病を遺伝として受けつぎ肉体的、精神的破滅へと向かう息子…等、"Social Disease" に視点をすえ、家庭の崩壊をするどく描くことにより、前作におとらぬ、否、むしろそれ以上の衝撃を社会に与えたのであった。その衝撃性ゆえに社会からは排撃された面もあったようであるが、John Gassner が、"But it is *Ghosts* that made Ibsen the most influential dramatist of the modern theatre"[1] と言うごとく、*Ghosts* は *A Doll's House* とともに Ibsen を近代劇の "the most influential dramatist" たらしめた傑作といえよう。

一方、南太平洋ヌクヒーヴァ島で食人種タイピーとともに過ごした体験をもとに書いた作品 *Typee* の爆発的人気で、一躍アメリカ文壇に登場する Melville は、その後あいついで *Omoo*, *Mardi*, *Redburn*, *White-Jacket* を世に出し、そして1851年に著した傑作 *Moby-Dick* によって作家としての地位を不動のものとする。翌1852年に発表された *Pierre* は、これまでの海洋を舞台としてきた Melville が一転、陸上を舞台に、理想主義に燃える青

年 Pierre の崩壊する過程を描くという重苦しい物語りとなっている。

Ibsen と Melville は19世紀のほぼ同時代を生きた作家ではあるが、両作家が文学的交流をもった痕跡はないし、またそれぞれの作品をどれほど読み、あるいは知っていたのかも定かではない。しかしながら、大西洋をはさんで19世紀を代表する両作家の作品、*Ghosts* と *Pierre* には戯曲と小説の違いこそあれ、登場人物、プロット展開にかなりの類似があり、それを見ていくのもまた興味あることだと思われる。この小論では、父親の罪が Oswald, Pierre の破滅をもたらす過程の分析を中心に *Ghosts*, *Pierre* の両作品の類似性を論じてみたい。

Ⅱ. *Ghosts*: Oswald の崩壊

三幕からなるこの *Ghosts* は、パリ遊学中の息子 Oswald が帰省している Alving 家の邸宅を舞台にくり広げられる。亡夫 Captain Alving の社会的名声をいだいて暮している Mrs. Alving にとって、一人前に成長し、芸術家への道を歩む息子 Oswald への期待は大きいものがあった。亡夫の遺産をもとに孤児のための施設、Orphanage を建設し、その開所を目前にひかえて、かつて彼女の結婚をとりもった牧師 Pastor Manders が Alving 家を訪れる。 Manders が "The orphanage is to be consecrated, as it were, to a higher purpose"[2] と言うごとく、崇高な目的のもとに建立される Orphanage とともに、 Alving の、そして Alving 家の社会的立場も確固たるものであった。しかしながら、後には Chamberlain となるなど、社会的地位、名声を得ていたと思われる Alving にも以外な秘められた過去のあったことが、 Mrs. Alving の Manders との会話で明らかとなる。Alving は道楽の限りをつくし、放埒な生活を送っていたのである。結婚後ほどなくその事実を知った彼女は家をとび出してしまう。状況、動機の違いこそあれ、このあたりの Mrs. Alving は前作 *A Doll's House* の Nora の軌跡を踏襲しているかに思われる。しかしながら Ibsen は *Ghosts* においては、牧師 Manders を配することにより Nora の軌跡を逆転し、 Mrs.

Alving を家庭に引き戻すことに成功する。

> Manders: Do you remember that less than a year of married life, you stood on the verge of an abyss? That you forsook your house and home? That you fled from your husband? Yes, Mrs. Alving ——fled, fled, and refused to return to him, however much he begged and prayed you?
>
> Mrs.Alving: Have you forgotten how infinitely miserable I was in that first year?
>
> Manders: ...We have simply to do our duty, Mrs. Alving! And your duty was to hold firmly to the man you had once chosen, and to whom you were bound by the holiest ties. (p. 16)

妻の義務とは、いかなる状況であれ、いったん選んだ夫にしっかとしがみついていることであり、さらには神聖なきずなでもって彼と結ばれているものであると Manders は Mrs.Alving を説きふせたのであった。Nora に夫、子供、家庭を捨てさせ、妻であるまえに一個の人間であるという、まさに婦人解放のテーマを前作 *A Doll's House* において描いた Ibsen のなんという鮮やかな転向であろうか。しかしながら *Ghosts* における悲劇は Mrs.Alving が家に戻り、Alving との生活を続けることから派生することを考えると、結局のところ Nora を逆説的に描いただけで、*A Doll's House* にみられる Ibsen の視点は本質的には何ら変わってはいないと言えよう。その点からすれば、Gassner が "*Ghosts* was a logical sequel to *A Doll's House*"[3] といっているのもうなずけよう。

夫のもとにもどった後の Mrs.Alving はみじめであった。

> Mrs.Alving: The truth is that my husband died just as dissolute as he had lived all his days.
>
> Manders: (Feeling after a chair) what do you say?
>
> Mrs.Alving: After nineteen years of marriage, as dissolute—in his desire at any rate—as he was before you married us. (p. 17)

つまり、Alving は結婚後、その死までの19年間、その放蕩性は全く変わ

ることはなかったのである。そして Alving 家で女中として働く Regina は実は Alving の私生児なのであった。この事実を知らされた Manders はさすがにがく然となる。表面上、Alving が社会的地位、名声を得ていただけに Mrs. Alving の苦悩はなおさら大きいものがあった。苦悩とともに彼女は夫の実体を完全に隠ぺいする。

> Mrs. Alving: ...I had to struggle twice as hard, fighting as though for life or death, so that nobody should know what sort of man my child's father was. And you know what power Alving had of winning people's heart. Nobody seemed able to believe anything but good of him. He was one of those people whose life does not bite upon their reputation. (p. 18)

Orphanage の建設も、実は Alving の名声を保持し、世間の風評をおさえるための彼女の涙ぐましい努力のひとつであったし、また息子 Oswald を親元を遠く離れ、パリへ遊学へ出したのも "It seemed to me the child must be poisoned by merely breathing the air of this polluted home" (p. 18) というごとく、息子が汚れた父親の悪影響を受けつぐことへの恐れからであった。事実、彼女が、"And besides, I had one other reason. I was determined that Oswald, my own boy, should inherit nothing from his father" (p. 18) というとき、それは夫の汚点が一点たりとも息子の身にふりかかることを許容しない彼女の強い姿勢があらわれているといえる。しかしながら、Mrs. Alving のそのような努力にもかかわらず、Oswald はすでに父から致命的な「罪」"the Sin" を受けついでいた。パリで医者より "There has been something worm-eaten in you from your birth," そして又、"The sins of the fathers are visited upon the children" (p. 25) との診断を受けた彼は心身ともに破れ果て、傷つき帰省していたのである。"Mother,my mind is broken down—ruined—I shall never be able to work again!" という彼の母への言葉は如実にそれを物語っている。第三幕も終幕に近く、夜明けを前に Oswald が息も絶えだえに「太陽」を求めて母の

足元にくずれ落ちるのは、父親の "Sin" が完全に息子を支配、そしてそれが結局家の崩壊へと結びついていくという悲劇を象徴しているといえよう。

> Oswald: Mather, give me the sun.
> Mrs. Alving: What do you say?
> Oswald: The sun. The sun.
> Mrs. Alving: Oswald, what is the matter with you? (p. 33)

目もうつろに、自らの足元にちぢみこんでいく Oswald を目の前にして Mrs. Alving は絶望かつ恐怖の叫びを発するのである。

> Mrs.Alving: What is this? Oswald! What is the matter with you? Oswald! Oswald! Look at me! Don't you know me?
> Oswald: The sun.—The sun.
> Mrs. Alving: I can't bear it! I can't bear it! Never! Where has he got them? Here! No; no; no!—no; no!
> Oswald: The sun.—The sun. (p. 33)

Oswald が叫ぶ「太陽」とは彼がふところにかくし持つ毒薬をさしているのであるが、それは同時に彼自身の現実の苦痛の終えんと来世における希望としての「太陽」を求める彼の悲痛な叫びであるといえよう。そしてその息子を前に、母親 Mrs. Alving が唯一なしうる手段は自らの手で息子にこの毒薬を与えることのみであり、まさに悲劇の大団円といえよう。

Ⅲ. *Pierre* : Pierre の崩壊

Pierre はストーリーの展開上、前半部の Saddle Meadow シーンと後半部の New York シーンの二部から構成されている。

神聖かつ美しい父親のイメージをいだいて名誉ある家名と広大な家屋敷をうけつぐ Pierre の Saddle Meadow での生活は、敬虔でかつプライド高い母親 Mrs.Glendinning, そして美しい婚約者 Lucy とともに幸福そのものであった。Charles Moorman は Saddle Meadow をアメリカのエデ

ンと評し、"Pierre, innocent and high-spirited, stands guarded by his heritage and his feudal world in the mist of an American Eden"[4] と言うのであるが、緑に囲まれ広大で美しい Saddle Meadow はまさしく没落以前のエデン、そしてそこに住む罪を知らぬ純真無垢な青年 Pierre はまさに没落以前のアダムであったといえよう。しかしながら、このような地上の楽園も、神秘的な黒髪の女性 Isabel の侵入によりもろくもくずれてしまう。Isabel は彼の父 Glendinning の私生児であることを Pierre に告げ、姉であることを認めるよう訴える。

> "Pierre Glendinning, thou art not the only child of thy father; in the eye of the sun, the hand that traces this is thy sister's; yes, Pierre, Isabel calls thee her brother——her brother!..."[5]

神聖な父親のイメージは完全に崩れさり、苦悩の末、Pierre は Isabel をその不幸な境遇から救う決意をする。

> Oh! Isabel, thou art my sister; and I will love thee, and protect thee, ay, and own thee through all. (p. 91)

家名を重んじ、亡夫の汚れの無さ "spotless" を心の支えとして生きる母 Mrs.Glendinning がそのような事実を受け入れることのないことを確信する Pierre は、彼女の誇りを奪わず、なおかつ Isabel をその不幸な境遇から救う唯一の手段として Isabel との偽装結婚をすることになる。激昂した母は Pierre を勘当、彼は Isabel とともに Saddle Meadow をはなれ、ニューヨーク市へと旅立つのである。Pierre のこの Saddle Meadow からニューヨーク市への旅立ちはまさにエデン喪失の神話、すなわちアダムのエデン追放を象徴しているといえよう。

物語りの後半部を占める大都市ニューヨークでの Pierre の生活は、ナイーブな彼にとってはまさに残酷そのものであった。生計を立てるべく小説を書くのであるがそれもうまくゆかず、彼を援助してくれるはずであった従兄の Glen は、それどころか逆に Pierre を裏切ってしまう。Pierre にとってニューヨークでの生活はすべてが裏目に出てしまう。絶望の中、

"the fool of Truth, the fool of Virtue, the fool of Fate, now quits ye forever" (p. 400) と叫び、Pierre は従兄の Glen を射ち殺してしまう。牢獄の Pierre を訪れるかつての婚約者 Lucy は、Isabel の口から彼らが姉弟であった事実を聞かされ、驚きのあまり Pierre の足元にくずれ落ち、息絶えてしまう。Pierre, Isabel もかねて用意してあった毒薬をあおり Lucy のあとを追うように息絶えていく。

> ...she 〔Isabel〕 fell upon Pierre's heart, and her long hair ran over him, and arbored him in ebon vines. (p. 405)

暗い牢獄の冷い床上には三人の屍が悲しく横たわっているだけであった。*Ghosts* 終幕において、Oswald が毒薬によって自らの死を求めると同様、Pierre をはじめとする主要人物たちの毒薬による死はこれまたまさに悲劇の catastrophe といえよう。

Ⅳ. Oswald, Pierre をとりまく人物構成

これまでⅡ、Ⅲで述べた両作品の梗概から、両作品において父親の "Sin" が息子の運命を破滅へみちびいていくというプロットの展開はきわめて類似したものとなっていることは明白であろう。Oswald が医師より "The sins of the fathers are visited upon the children" と言われるその同じ言葉が *Pierre* においてはいみじくも牧師 Falsgrave の口から述べられるのである。

次に Oswald, Pierre の崩壊をとりまく主要キャラクターの類似性をみていくことにする。

(1) Mrs. Alving と Mrs. Glendinning

Mrs. Alving が完璧なまでに夫の "Sin" を隠ぺいするのは、息子への悪影響の危惧もさることながら、世間の風評に対する抵抗のあらわれであり、亡夫の遺産による孤児院 Orphanage の建設は世間の風評を抑える有効な

手段であった。"So the Orphanage was to deaden all rumors and set every doubt at rest" (p. 18) というMrs. Alving の言葉にはっきりとそれをうかがい知ることができよう。亡夫の名声がたとえ虚偽のものであったにせよ、その名声を堅守するのは結局、彼女自身のプライド、そして家名の固持ということになるであろう。Manders が言う "duty" の名のもとに、いったんとび出した家へ戻るのも結局、彼女自身の名誉の保持と虚栄心がその底流となっていよう。そしてその視点から見るならば、彼女は Mrs. Glendinning 像ときわめて類似してくる。Isabel の出現のあと、Pierre の母はかくのごとく表現される。

> Then, high-up, and towering , and all-forbidding before Pierre grew the before unthought-of wonderful edifice of his mother's immense pride of affluence, her pride of purity, and all her pride of high-born, refined, and wealthy Life, and all the Semiramian pride of woman. (p. 115)

夫の放埒な生活実体は Mrs. Glendinning の知るところとまではいたらなかったけれども、高貴な生まれで種々のプライドを合わせもつ彼女には、夫のそのような実体は認められないことであり、またよしんばそれを知らされたとしても、認めるはずもなかった。以下の Pierre との会話がそれを如実に物語っている。Pierre は一般論として父の不貞を次のように述べる。

> "...For instance, should I honor my father, if I know him to be a seducer?"

母親は顔を赤らめ、半ば身を起こし次のように言う。

> "Pierre! Pierre! There is no need of these argumentative assumptions. You immensely forget yourself this morning." (p. 130)

Pierre が結局破滅することになる Isabel との偽装結婚も、彼女のそのような名誉と家名に固執する不寛容性にあったといわねばなるまい。

(2) Pastor Manders と Rev. Falsgrave

Ghosts における牧師 Manders は Alving 家の親しい友であり、良き相談者として劇中主要な位置を占めているのであるが、*Pierre* の中の牧師 Falsgrave も同様な立場にある人物といえよう。Mrs. Alving の結婚をとりもち、結婚後の彼女の苦しみを聞いてやるのも Manders であれば、一方、Pierre の Isabel との偽装結婚後、失意落胆の極にある Mrs. Glendinning の話しを聞いてやり慰めるのも Falsgrave であった。しかしながら、良き理解者であったはずの Manders, Falsgrave ともに Mrs. Alving, Mrs. Glendinning の危機的状況を救うには全く無力であった。Manders は確かに、Mrs. Alving に女性としての徳を説き、家庭に戻らせるし、Orphanage の建設にさいしても尽力するのであるが、Alving の実体が彼女の口から明かされたあと、彼女の苦しみ、そして父の "Sin" を背負う Oswald の苦悩、そのいずれの救済においても全くなすすべを知らないのである。そしてその無力性は Manders の助言により保険をかけてなかった Orphanage が火災により消失し、無に帰してしまうことに象徴される。同様のことが Falsgrave にもいえるのである。Pierre の Isabel との結婚というショッキングな事実を前に、失意のどん底にある Mrs. Glendinning に対し、Falsgrave はなすすべもなく逃げてしまう。

> "It is the hour of woe to thee; and I confess my cloth hath no consolation for thee a while. Permit me to withdraw from thee, leaving my best prayers for thee, that thou mayst know some peace, ere this now shut-out sun goes down. Send for me whenever thou desirest me.—May I go now?"

そのような Falsgrave に対し、Mrs. Glendinning は失望し、彼の無力さを非難する。

> "Begone! and let me not hear thy soft, mincing voice, which is an infamy to a man! Begone, thou helpless, and unhelping one!" (p. 227)

救済の立場に立つべき牧師が、ともに無力でそして逃避してしまうのは、両作品における大きなアイロニーであるといえよう。

(3) Mr. Alving と Mr. Glendinning

Pierre の父親、Mr.Glendinning は次のように表現される。

> When Pierre was twelve years old, his father died, leaving behind him, in the general voice of the world, a marked reputation as a gentleman and a Christian; in the heart of his life, a green memory of manly healthy days of undoubted and joyful wedded life, and in the inmost soul of Pierre, the impression of a bodily form of rare manly beauty and benignity, only rivaled by the supposed perfect mold in which his virtuous heart had been cast. (p. 93)

上記の引用にみられるように、Pierre の心に残る父親のイメージは一点の汚点もなく、神聖かつ美しいものであった。又、"a marked reputation and a Christian" と表現されるごとく、社会的地位、名声をもかちえていた。これは *Ghosts* における Alving が "He was one of those people whose life does not bite upon their reputation" (p. 18) と表現されているように、彼が地域の人々の心をとらえ、かつ名声をえていたこと、そして Manders が "I can see that his father stands before him as an ideal" (p. 20) といい、さらに Oswald に向って "You have inherited the name of an energestic and admirable man" (p. 15) というごとく、Oswald にとって父親が尊厳ある理想像として映っていたことと軌を一にする。

Alving, Glendinning ともに作品中すでに死亡しており、直接登場することはないのであるが、両者の生前の全く同一の "Sin" が黒い影となって作品全体をおおい、息子の破滅、そして家の崩壊をもたらすという点、又、それぞれの息子の心に残る彼らのイメージが理想的な美しいものであり、さらに社会的名声をえていたという点で、両者は作品中全く同一線上に位置する人物となっている。そして両者の表の理想像の裏にひそむ、息子を

破滅へとみちびくあの放埒かつ欺瞞的人間像、すなわち二重人格性が両作品の悲劇性をよりいっそう増幅しているのである。

V. Oswald, Pierre: 受難のキリストのイメージ

これまで、*Ghosts*, *Pierre* 両作品における父親の "Sin" がそのそれぞれの息子に影響を与え、かつ崩壊せしめるというプロット構成、そして人物構成の類似性をみてきたわけであるが、両作品で "The sins of the fathers are visited upon the children" と述べられているごとく、家系の中で継承されていく "Sin" は両作品の底流をなす "Controlling metaphor" であり、そしてその "Sin" を背負い崩壊する若き Oswald, Pierre 像は受難のキリストのイメージと重なってくる。Oswald の苦難に関して、Brian Johnson が、

> This Christ-identity is grimly parodied in the fact that he must atone for the guilt of the past, must suffer a spiritual breakdown that is like a crucifixion.[6]

と評し、キリストの受難のパロディーであると言っているのであるが、父親の "Sin" を原罪の象徴としてとらえれば、作品 *Ghosts* は人間の没落 (Fall of Man) の神話を踏襲しているといえるし、Orphanage は原罪を回復すべき "Offering" であったといえよう。しかしながらその Orphanage が火災で消失するとき、全ての救いもまた消失してしまったといえる。第三幕で Mrs. Alving が、

> The whole thing burnt! ...burnt to the ground! (p. 28)

と言い、そして Oswald が、

> Everything will burn. All that recalls father's memory is doomed. Here am I, too, burning down. (p. 29)

と言うのは、まさに "Offering" による救済が失敗に帰したこと、つまり人間の原罪はあいもかわらず継承されていくのだということを象徴しているといえる。

Pierre においては、Saddle Meadow が没落以前のエデン、そしてそこに住む Pierre は没落以前のアダムであり、その Pierre が Saddle Meadow を捨て、ニューヨークへと旅立つ過程は人間没落 (Fall of Man) の神話のイメージを受けつぐものであるとはすでに述べたところであるが、作品の後半分を占める Pierre のニューヨークでの生活、そして作品中 "god-like" あるいは "demi-god" とも表現される Pierre のニューヨークでの苦難はこれまた受難のキリストのイメージと重なってくるのである。父親の "Sin"、すなわち原罪の回復は Isabel の救済を通してなされるはずであった。しかし彼自身の彼女との "incestuous" な関係は[7] *Ghosts* における Orphanage の消失同様、全ての救済が無に帰すと同時に、彼自身の破滅へとつながっていくのである。Charles Feidelson が、

> Just as Narcissus was drowned in the fountain, any man who pursues the image too far will lose his sense...[8]

と述べているように、純真な青年 Pierre は確かに理想を求めるあまり理性を失ってしまったということはいえるかもしれない。その点では、同じ破滅でも自身の救いを Regina に求め、"Mother, Regina is my only salvation!" (p. 26) と叫ぶ Oswald の受動性とは好対称をなしているといえよう。

Ⅵ. むすび

Ibsen の少年時代は父親の商売も順調で比較的めぐまれたものであったと思われる。しかしながら平穏な日々も長くは続かなかった。彼が 8 才の時、父の商売が失敗倒産し、以後、苦難かつ破乱に満ちた青年時代を過ごすことになる。Grimstad の薬品会社で奉公として働き、さらには、急進的労働運動にも加わり、集会やデモ、労働連盟の機関誌の執筆等に関わっていく。のちに彼の戯曲にあらわれる社会問題を追求していく姿勢もこのあたりに基をおくのであろう。また Melville も、8 人兄弟の第三子として、その少年時代はめぐまれたものであったようであるが、彼が12才の時、父の商売が失敗倒産し、Ibsen 同様、商店や農場の手伝いをするなど苦しい

青年時代を過ごしている。そして1841年、彼の人生に転機をもたらすこととなる捕鯨船に乗りこんでいくことになるのである。父親の商売の失敗倒産から派生する家庭の経済的危機が多感な少年の以後の人生に影響を与えたことは想像に難くない。 *Ghosts*, *Pierre* 両作品の類似性には、そのような Ibsen, Melville の biographical な側面、特に父親の商売の失敗倒産、そして若き息子たちの苦難の日々の姿が投影されているように思われる。両作家はその父親像、そして自らの苦難の青年像を、父親の "Sin" が理想に燃える若き青年 Oswald, Pierre (ともに芸術を志す。 Oswald はパリで芸術の勉強中であるし、 Pierre はニューヨークにおいて小説を書きつづける) をともに破滅へとみちびくかたちに置きかえ、さらには人間没落の神話 (Myth of the Fall of Man) に迫ったのであろうか。そして奇しくも両作品はともに、その発表当時には評価されず、むしろ一般読者や書店の店頭から放逐されたのであった。

NOTES

1. John Gassner, *A Treasury of Theatre*, Vol. Ⅱ (New York: Simon & Schuster, Inc., 1970), p. 3.

2. Henrik Ibsen, Ghosts(John Gasnner, ed. *A Treasury of Theatre*, Vol. Ⅱ), p. 13. 本論文中の引用は全て当版による。

3. John Gassner, *A Treasury of Theatre*, p. 5.

4. Charles Moorman, "Melville's *Pierre* and the Fortunate Fall," *American Literature*, ＸＸＶ(1953), p. 17.

5. Herman Meville, *Pierre* (New York: New American Library, Inc., 1964), p. 89. 本論文中の引用は全て当版による。

6. Brian Johnson, "Archetypal Repetition in 'Ghosts', "*Scandinavian Studies*, Vol.41(1969), p.117.

7. *Ghosts* においては、Oswald と Regina の "incestuous" な関係を暗示する場面が第一幕終盤で描かれる。隣室から聞こえてくる Regina の言葉 "Oswald! take care! are you mad? Let me go!" に、Mrs. Alving は慄然となり、"Ghosts! The couple from the conservatory—risen again!" と叫ぶのである。

8. Charles Feidelson, "Note" to *Moby–Dick* (Indianapolis: Bobbs–Merrill Co. Inc., 1975), p.26.

BIBLIOGRAPHY

Arrestad, Sverre. "Ibsen's Concept of Tragedy, "*PMLA*, LXXIV (1959),285–297.

Bentley, Eric, *The Playwright as Thinker*. New York: Reynal & Hitchcock, 1946.

Braswell, William. "The Early Love Scenes of Melville's *Pierre*,"*American Literature*, XXII (1950), 283–289.

Brustein, Robert. *The Theatre* of *Revolt*. Boston: Little, Brown and Co., 1964.

Corringan, Robert W. "The Sun Always Rises: Ibsen's *Ghosts* as Tragedy ?" *Educational Theatre Journal*, XI (1959), 171–180.

Feidelson, Charles Jr. (ed.) *Moby–Dick*. Indianapolis: Bobbs–Merrill Co. Inc., 1975.

Gassner, John. (ed.) *A Treasury* of *Theatre*. New York: Simon & Schuster, Inc., 1970.

Hillway, Tyrus. "Pierre, the Fool of Virture, "*Ameican Literature*, XXI (1949), 201–211.

Johnston, Brian. "Archetypal Repetition in 'Ghosts', "*Scandinavian Studies*, 41 (1969), 93–125.

Koht, Halden. *Life of Ibsen*. New York: Benjamin Blom, Inc., 1971.

Lawrence, D.H. *Studies in Classic American Literature*. New York: Doubleday, 1953.

Levin, Harry. *The Power of Blackness*. New York: Knopf, 1958.

Lewis, R.W.B. *The American Adam*. Chicago: University of Chicago press, 1955.

MacCarthy, D. "Story of Mrs.Alving," *New Statesman and Nation*, 19 (1940), 722–723.

Matthiessen, F.O. *American Renaissance*. New York: Oxford University Press, 1941.

Melville, Herman. *Pierre*. New York: New American Library, Inc., 1964.

Moorman, Charles. "Melvilles's *Pierre* and the Fortunate Fall," *American Literature*, XXV (1953), 13–30.

———. "Melville's Pierre in the City," *American Literature*, XXVII

(1955), 571–577.

Sedgwick, William. *Herman Melville: The Tragedy of Mind.* New York: Russell and Russell, 1962.

ABSTRACT

The Father's Sins in Ibsen's *Ghosts* and Melville's *Pierre*

Masashi Taira

When Ibsen wrote *A Doll's House* in 1879, the work caused a major sensation throughout the whole world because of its theme of "women's liberation." But the next work *Ghosts*, written in 1881, caused even more sensation in "polite society," describing the corruption of the family caused by the sins of the father. It was this work, *Ghosts*, that made Ibsen "the most influential drmatist of the modern theatre."

After having established his literary career with the masterpiece, *Moby–Dick*, Melville published *Pierre* in 1852. Most novels before *Pierre*, such as *Typee*, *Omoo*, *Mardi*, and *Moby–Dick* as well, are largely sea stories. In *Pierre*, Melville's world becomes a Hawthorne–like land, in which the sins of the father bring down a catastrophe upon Pierre and his family.

Although Ibsen and Melville are great writers who lived in the same period in the 19th century, there is no evidence that these two writers had a literary acquaintanceship and there is no indication that they knew each other or were familiar with each other's works. However, these two works, *Ghosts* and *Pierre*, have rather similar plots and characters, even though they are different in genre—*Ghosts* is a drama and *Pierre* a novel. In this paper, I will analyze the similarities of these two works, then approach the "Myth of the Fall of Man," centering on the father's sins and the consequent fall of their children—Oswald and Pierre, and finally give biographical remarks on the probable cause of these similarities.